校風を一変させた佐々木校長

実質的な校長の不在で揺れた昭和七年は過ぎ、翌昭和八年四月、佐々木哲郎校長が着任した。佐々木校長は東京帝国大学哲学科を卒業後、青森・宮城・札幌・新潟・愛知など各地の公立・私立校で教鞭をとり、岩手中学校長の声が掛かったときには、厳格で鳴る長野中学の校長を務めていた。ときに五二歳、教壇生活の半ばを校長として過ごしてきた佐々木は、豊富な経験に裏打ちされた溢れんばかりの自信をもって岩手中学に着任した。

着任して初めての職員会議は延々三時間におよんだ。雄弁家の佐々木校長は滔々と教学の大方針を延べ、最後に「いま述べたことに反対の方はすぐに辞職願いを書いていただきたい」と付け加えて教師たちの度肝を抜いた。若き英語教師として岩中に着任したばかりで、のちに佐々木の後を継いで第四代の校長となる山中順三は、この職員会議が終わっての帰り道、同僚と「こりゃとても勤まりそうにない」「いや僕だって駄目だ」などと話し合った。

鈴木校長辞任後、やや動揺や弛緩のあった学園を引き締めるため、佐々木校長は体制の整備と充実に力を注ぎ、まず諸規定を徹底的に洗いなおして改正した。長時間の職員会議がしばしば開かれた。朝礼訓話では岩中精神を強調し、校風刷新を叫ぶのであった。規定は厳しく適用され、怠け者に容赦はせず、したがって落第生も激増した。昭和一〇年には在籍約四〇〇名中五〇数人が原級（落第）となったほどだった。

卒業学年にも原級者が出て、友人の〝助命〟のために職員室へ乗り込んだ生徒もいた。当時の岩中生には友人のために一肌脱ごうという気風があった。そして落第した生徒も簡単に学校をやめたり、ぐれたりせずに割とついてきた。温かい友人関係が救いだったからだ。

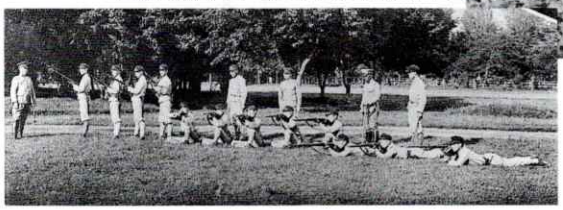
宗教家としての一面を持つ鈴木初代校長が人格主義をとなえたように、哲学家としての一面を持つ佐々木校長も個人の特色、人格価値を重視した。しかし教育の実践方法において、両者にはかなりの違いがあった。これを一言で言うならば、生徒や職員に対する鈴木校長の愛情が〝**やさしさ**〟を基調としていたのに対して、佐々木校長のそれは〝**きびしさ**〟を基調としていた。

これまでの本校の校風のうち、長所美点は残さなければならないが、また欠点短所があればすみやかに刷新改善し、善美健全の校風をつくりあげるため、すべての職員生徒が一致協力することを切望する――これが佐々木校長の信念だった。当然、鈴木校長の時代とは校風が一変

第３代校長
佐々木　哲　郎

昭和13年揮毫の佐々木校長の書

入営時に行われた戦闘訓練（右）と各個教練（下）（いずれも昭和９年）



スキー部のメンバー（昭和９年）

した。

佐々木校長は進学率の向上に力を注いだ。講堂で生徒に話すとき、よく五回生の一条次朗を引き合いに出した。一条は岩中の校風を慕い、岩中を第一志望にして入学した生徒だった。そして抜群の成績で海軍兵学校に進む。海軍兵学校への合格は、岩手県からはじつに八年振りの快挙だった。諸君もこの優秀な先輩を見習ってほしい、と。

一条とともに、五回生には二高から東大に進んだ三田循司、同じく東大に進んだ熊谷竜雄などの秀才たちもいた。三田は東大時代に詩を通じて太宰治と親しくなった。大学を卒業してすぐに出征した三田は、太宰に何通かの手紙を出している。その最後の一通に、太宰は心の底から感動した。その手紙には、こう書かれていた。

「お元気ですか。／遠い空から御伺いします。／無事、任地に着きました。／大いなる文学のために、／死んで下さい。／自分も死にます。／この戦争のために。」

この便りのあと、三田循司はほんとうにアッツ島で戦死した。太宰は三田を主人公とした短編「散華」を書き、昭和一九年三月号の『新若人』に発表している。

佐々木校長の教育方針が実を結び、生徒の学力向上は目覚ましいものがあった。たとえば八回生の場合、一クラスから金沢修一・佐々木晃・宮静孝の陸軍士官学校合格三人組を出している。また、このころの勉強家たちはみな運動選手でもあった。宮は陸軍士官学校卒業時に剣道の御前試合を披露したほどの腕前であったし、一条はスキーの選手、三田は高跳び、熊谷は柔道の選手だった。

勉強に精を出した秀才たちも、教師にいたずらをしかけ、ライバル盛岡中学との喧嘩に専念した悪童たちも、部活動と軍事教練だけはまじめにやった。軍事教練ではめきめきと腕をあげ、公会堂前の分列行進などで一糸乱れぬ団体行動がそのまま学校の名誉を高めることになった。

制服が国防色になり、職員会議でも『国体明徴論』を輪読するようになった。草創のころとはだいぶ違った世相になってきたのだった。